

歸去來

太宰治

青空文庫

人の世話にばかりなつて来ました。これからもおそらくは、そんな事だろう。みんなに大事にされて、そうして、のほん顔で、生きて来ました。これからも、やつぱり、のほん顔で生きて行くのかも知れない。そうして、そのかずかずの大神に報いる事は、おそらく死ぬまで、出来ないのではあるまいか、と思えば流石に少し、つらいのである。

実に多くの人の世話になつた。本当に世話になつた。

このたびは、北さんと中畑さんと二人だけの事を書いて置くつもりであるが、他の大神の事も、私がもちし佳い仕事が出来ようになつてから順々に書いてみたいと思つてゐる。今はまだ、書きかたが下手だから、ややこしい関係の事など、どうしても、うまく書けないのではあるまいかというような気がするのであるが、その点、北さんと中畑さんの事ならば、いまの私の力でもつてしても、わりあい正確に書けるのではなからうかと思うのである。それは、どちらかと言えば、単純な、明白な関係だからである。けれども、実在の、つましい生活人を描くに当つて、それ相応のこまかい心遣いの必要な事も無論である。あの人たちには、私の描写に対して訂正を申込み給う機会さえ無いのだから。

私は絶対に嘘を書いてはいけない。

中畑さんも北さんも、共に、かれこれ五十歳。中畑さんのほうが、一つか二つ若いかも知れない。中畑さんは、私の死んだ父に、愛されていたようだ。私の町から三里ほど離れた五所川原ごしょがわらという町の古い呉服屋の、番頭さんであつたのだが、しじゅう私の家へやって来ては、何かと家の用事までしてくれていたようである。私の父は中畑さんを「そうもく」と呼んでいた。つまり、中畑さんには少しも色気が無くて、三十歳ちかくなってもお嫁さんをもらおうとしないのを、からかつて「草木」などと呼んでいたものらしい。とうとう、私の父が世話して、私の家と遠縁の佳いお嬢さんをもらつてあげた。中畑さんは、間もなく独立して呉服商を営み、成功して、いまでは五所川原町の名士である。この中畑さん御一家に、私はこの十年間、御心配やら御迷惑やら、実にお手数をかけてしまった。私が十歳の頃、五所川原の叔母おばの家に遊びに行き、ひとりで町を歩いていたら、

「修ツちやあ！」と大声で呼ばれて、びっくりした。中畑さんが、その辺の呉服屋の奥から叫んだのである。だし抜けだったので、私は、実にびっくりした。中畑さんが、そのような呉服屋に勤めているのを私は、その時まで知らなかったのである。中畑さんは、その薄暗い店に坐つていて、ポンポンと手を拍うつて、それから手招きしたけれども、私はあんなに大声で私の名前を呼ばれたのが恥ずかしくて逃げてしまった。私の本名は、修治とい

うのである。

中畑さんに思いがけなく呼びかけられてびっくりした経験は、中学時代にも、一度ある。青森中学二年の頃だったと思う。朝、登校の途中、一個小隊くらいの兵士とすれちがった時、思いがけなく大声で、

「修ッちゃあ！」と呼ばれて仰天した。中畑さんが銃を担いで歩いているのである。帽子をあみだにかぶっていた。予備兵の演習召集か何かで訓練を受けていたのであろう。中畑さんが兵隊だったとは、実に意外で、私は、しどろもどろになった。中畑さんは、平気でここにこ笑い、ちよつと列から離れかけたので私は、いよいよ狼狽して、顔が耳元まで熱くなって逃げてしまった。他の兵隊さんの笑い声も聞えた。

その、呼びかけられた二つの記憶を、私は、いつまでも大事にしまって置きたいと思っている。

昭和五年に東京の大学へはいつて、それから、もう中畑さんは私にとって、なくてはならぬ人になってしまっていた。中畑さんも既に独立して呉服商を営み、月に一度ずつ東京へ仕入れに出て来て、その度毎に私のところへこつそり立ち寄ってくれるのである。当時、私は或る女の人と一軒、家を持っていて、故郷の人たちとは音信不通になっていたの

であるが、中畑さんは、私の老母などからひそかに頼まれて、何かと間を取りついでくれたのである。私も、女も、中畑さんの厚情に甘えて、矢鱈やたらに我儘わがままを言い、実にさまざまの事をたのんだのである。その頃の事情を最も端的に説明している一文が、いま私の手許にあるのでそれを紹介しよう。これは私の創作「虚構の春」のおしまいの部分に載っている手紙文であるが、もちろん虚構の手紙である。けれども事実じじつに於いて大いに相違があつても、雰囲氣ふんいきに於いては、真実に近いものがあると言つてよいと思う。或る人（決して中畑さんではない）その人から私によこした手紙のような形式になっているのであるが、もちろん之は事實これに於いては根も葉も無いことで、中畑さんはこんな奇妙な手紙など本当に一度だつてお書きになつた事は無いので、これは全部、私自身が捏造ねつぞうした「小説」に過ぎないのだという事は繰りかえし念を押して、左にその一文を紹介しよう。私がどんなに生意気に思い上つて、みんなに迷惑をおかけしていたかという事さえ、わかつていただけたらいいのである。

「先日、（二十三日）お母上様のお言いつけにより、お正月用の餅もちと塩引しおびき、一包、キウリ一樽たるお送り申し上げましたところ、御手紙に依よれば、キウリ不着の趣き御手数ながら御地停車場を御調べ申し御返事願ねがいあげそうろう上候、以上は奥様へ御申伝え下されたく、以下、二

三言、私、明けて二十八年間、十六歳の秋より四十四歳の現在まで、津島家出入りの貧し
 き商人、全く無学の者に候が、御無礼せんえつ、わきまえつつの苦言、いまは延々すべき
 時に非ずと心得られ候まま、汗顔平伏、お耳につらきこと開陳、暫時、おゆるし被下度
 候。うわさ噂に依れば、このごろ又々、借錢の悪癖萌え出で、一面識なき名士などにまで、借錢
 の御申込、しかも犬の如き哀訴歎願、おまけに断絶を食い、てんとして恥じず、借錢どこ
 が悪い、お約束の如くに他日返却すれば、向うさまへも、ごめいわくは無し、こちらも一
 命たすかる思い、どこがわるい、と先日も、それがために奥様へ火鉢投じて、ガラス戸二
 枚破損の由、よし話、半分としても暗涙とどむる術ございませぬ。貴族院議員、勲二等の御家
 柄、貴方がた文学者にとつては何も誇るべき筋みちのものに無之、これなく古くさきものに相違
 なしと存じられ候が、お父上おなくなりのちの天地一人のお母上様を思い、私めに顔たて
 させ然るべしと存じ候。しか『われひとりを悪者として勘当除籍、家郷追放の現在、いよいよ
 よわれのみをあしざまにのしり、それがために四方八方うまく治まり居る様子』などの
 お言葉、おうらめしく存じあげ候。今しばし、お名あがり家とどのうたるのちは、御兄上
 様御姉上様、何条もつてあしざまに申しましようや。必ずその様の曲解、御無用に被存候。
 先日も、山木田様へお嫁ぎの菊子姉上様より、しんからのおなげき承り、うけたまわ私、芝居のよう

なれども、政岡の大役をお引き受け申し、きらいのお方なれば、たとえ御主人筋にても、かほどの世話はごめんにて、私のみに非ず、菊子姉上様も、貴方へのお世話のため、御嫁先の立場も困ることあるべしと存じられ候ところも、むりしての御奉仕ゆえ、本日がぎりよそからの借銭は必ず必ず思いとどまるよう、万やむを得ぬ場合は、当方へ御申越願度^{ねがいた}く、でき得る限りの御辛抱ねがいたく、このこと兄上様へ知れると一大事につき、今回の所は私が一時御立替御用立^{もうしあげ}申^{そうろうあいだ}上^こ候^こ間、此の点お含み置かれるよう願上候。重ねて申しあげ候が、私とて、きらいのお方には、かれこれうるさく申し上げませぬ、このことお含みの上、御養生、御自愛、まことに願上候。」

昭和十一年の初夏に、私のはじめての創作集が出版せられて、友人たちは私のためにその祝賀会を、上野の精養軒でひらいてくれた。偶然その三日前に中畑さんは東京へ出て来て、私のところへも立ち寄ってくれた。私は中畑さんに着物をねだった。最上等の麻^{あさ}の着物と、縫紋の羽織と夏^{なつばかま}袴と、角帯、長襦袢^{ながじゆばん}、白足袋^{しろたび}、全部そろえて下さいと願ったのだが、中畑さんも当惑の様子であつた。とても間に合いません。袴や帯は、すぐにととのえる事も出来ますが、着物や襦袢はこれから柄を見たてて仕立てさせなければいけないのだし、と中畑さんが言うのにおつかぶせて、出来ますよ、出来ますよ、三越かどこかの

大きい呉服屋にたのんでごらん、一昼夜で縫ってください、裁縫師が十人も二十人もかかって一つの着物を縫うのですから、すぐに出来ず、東京では、なんでも、出来ないって事はないんだ、と、ろくに知りもせぬ事を自信たっぷりで言うのである。とうとう中畑さんも、それではやってみます、と言った。三日目の、その祝賀会の朝、私の注文の品が全部、或る呉服屋からとどけられた。すべて、上質のものであった。今後あのように上質な着物を着る事は私には永久に無いであろう。私はそれを着て、祝賀会に出席した。羽織は、それを着ると芸人じみるので、惜しかったけれど、着用しなかった。会の翌日、私はその品物全部を質屋へ持って行った。そうして、とうとう流してしまったのである。

この会には、中畑さんと北さんにも是非出席なさるようにすすめたのだが、お二人とも出席しなかった。遠慮したのかも知れない。あるいは御商売がいそがしく、そのひまが無かったのかも知れない。私は中畑さんと北さんに私の佳い先輩、友人たちを見せて、お二人に安心させたいと思っていたのだが、それも、私のいい気な思い上りかも知れなかった。そんな祝賀会をお見せしたって、中畑さんも北さんも安心するどころか、いよいよ私の将来についてハラハラするだけの事かも知れなかった。

私は北さんにも、実に心配をおかけしていた。北さんは東京、品川区の洋服屋さんであ

る。洋服屋さんといつても、ただの洋服屋さんではない。変っている。お家は、普通の邸宅である。看板も、飾かざり窓まども無い。そうして奥の一部屋で熟練のお弟子が二人、ミシンをカタカタと動かしている。北さんは、特定のおとくいさんの洋服だけを作るのだ。名人氣質の、わがままな人である。富貴も淫いんする能あたわずといったようなところがあつた。私の父も、また兄も、洋服は北さんに作ってもらう事にきめていたようである。私が東京の大学へはいつてから、北さんは、もっぱら私を監督した。そうして私は、北さんを欺あざむいてばかりいた。ひどい悪い事を、次々とやらかすので、ついには北さんのお宅の二階に押し込められて、しばらく居い候そうろうのような生活をせざるを得なくなった事さえあつた。故郷の兄は私のだらし無さに呆あきれて、時々送金を停止しかけるのであるが、その度毎に北さんは中へはいつて、もう一年、送金をたのみます、と兄へ談判してくれるのであつた。一緒にいた女のひと、私は別れる事になったのであるが、その時にも実に北さんにお手数をかけた。いちいちとても数え切れない。私の実感を以もつて言うならば、およそ二十の長篇小説を書き上げるくらいの御苦労をおかけしたのである。そうして私は相変らずの、のほほん顔で、ただ世話に成りつ放し、身のまわりの些細ささいの事さえ、自分で仕様とはしないのだ。

三十歳のお正月に、私は現在の妻と結婚式を挙げたのであるが、その時にも、すべて中

畑さんと北さんのお世話になってしまった。当時、私はほとんど無一文といっていい状態であった。結納金^{ゆいのうきん}は二十円、それも或る先輩からお借りしたものである。挙式の費用など、てんで、どこからも捻^{ねん}出^{しゅつ}の仕様が無かったのである。当時、私は甲府市に小さい家を借りて住んでいたのであるが、その結婚式の日に普段着のままで、東京のその先輩のお宅へ参上したのである。その先輩のお宅で嫁と逢って、そうして先輩から、おさかずきを頂戴して、嫁を連れて甲府へ帰るという手筈^{てはず}であった。北さん、中畑さんも、その日、私の親がわりとして立会って下さる事になっていた。私は朝早く甲府を出発して、昼頃、先輩のお宅へ到着した。私は本当に、普段着のままで、散髪もせず、袴^{はかま}もはいていなかった。着のみのままの状態だったし、懷中も無一文に近かった。先輩は書斎で静かに仕事をして居られた。（先輩というのは、実は〇〇先生なのだが、〇〇先生は、小説や随筆にお名前を出されるのを、かねがねとてもいやがって居られるので、わざと先輩という失礼な普通名詞を使用するのである。）先輩は、結婚式も何も忘れてしまっているような様子であった。原稿用紙を片づけながら、庭の樹木の事など私に説明して聞かせた。それから、ふつと気がついたように、

「着物が来ている。中畑さんから送って来たのだ。なんだか、いい着物らしいよ。」と言

った。

黒羽二重の紋服一かさね、それに袴と、それから別に絹の縞しまの着物が一かさね、少しも予期していないものだつた。私は、呆然ぼうぜんとした。ただその先輩から、結婚のしるしの盃をいただいて、そうして、そのまま嫁を連れて帰ろうと思つていたのだ。やがて、中畑さんと北さんが、笑いながらそろつてやつて来た。中畑さんは国民服、北さんはモーニング。「はじめましょう、はじめましょう。」と中畑さんは氣が早い。

その日の料理も、本式の会席膳で鯛たいなども附いていた。私は紋服を着せられた。記念の写真もうつした。

「修治さん、ちよつと。」中畑さんは私を隣室へ連れて行つた。そこには、北さんもいた。私を坐らせて、それからお二人も私の前にきちんと坐つて、そろつてお辞儀をして、

「今日は、おめでとうございます。」と言つた。それから中畑さんが、

「きょうの料理は、まずしい料理で失礼ですが、これは北さんと私とが、修治さんのために、まかなつたものですから、安心してお受けなさつて下さい。私たちも、先代以来なみなみならぬお世話になつて居りますから、こんな機会に少しでもお報いしたいと思つてゐるのです。」と、真面目に言つた。

私は、忘れまいと思った。

「中畑さんのお骨折りです。」北さんは、いつでも功を中畑さんにゆずるのだ。「このたびの着物も袴も、中畑さんがあなたの御親戚をあちこち駈け廻って、ほうぼうから寄附を集めて作って下さったのですよ。まあ、しっかりおやりなさい。」

その夜おそく、私は嫁を連れて新宿発の汽車で帰る事になったのだが、私はその時、洒^し落^やれや冗談でなく、懷中に二円くらいしか持つていなかったのだ。お金というものは、無い時には、まるで無いものだ。まさかの時には私は、あの二十円の結納金の半分をかえしてもらうつもりでいた。十円あったら、甲府までの切符は二枚買える。

先輩の家を出る時、私は北さんに、「結納金を半分、かえしてもらえねえかな。」と小声で言った。「あてにしていたんだ。」

その時、北さんは実に怒った。

「何をおっしゃる！ あなたは、それだから、いけない。なんて事を考えているんだ。あなたは、それだから、いけない。少しも、よくなっていないじゃないですか。そんな事を言うなんて、まるでだめじゃないですか。」そう言って御自分の財布から、すらりすらりと紙幣を抜き取り、そつと私に手渡した。

けれども新宿駅で私が切符を買おうとしたら、すでに嫁の姉夫婦が私たちの切符（二等の切符であつた）を買ってくれていたので、私にはお金が何も要らなくなつた。

ブラットホームで私は北さんにお金を返そうとしたら、北さんは、

「はなむけ、はなむけ。」と言つて手を振つた。綺麗きれいなものだつた。

結婚後、私にも、そんなに大きい間違いが無く、それから一年経つて甲府の家を引きはらつて、東京市外の三鷹町みたかに、六畳、四畳半、三畳の家を借り、神妙に小説を書いて、二年後には女の子が生れた。北さんも中畑さんもよろこんで、立派な産衣うぶぎを持つて来て下さつた。

今は、北さんも中畑さんも、私に就ついて、やや安心をしている様子で、以前のように、ちよいちよいおいでになつて、あれこれ指図さしずをなさるような事は無くなつた。けれども、私自身は、以前と少しも変わらず、やつぱり苦しい、せつぱつまつた一日一日を送り迎えているのであるから、北さん中畑さんが来なくなつたのは、なんだか淋さびしいのである。来ていただきたいのである。去年の夏、北さんが雨の中を長靴はいて、ひよっこりおいでになつた。

私は早速、三鷹の馴染なじみのトンカツ屋に案内した。その女のひとが、私たちのテエブル

に寄つて来て、私の事を先生と呼んだので、私は北さんの手前もあり甚だ具合いのわるい
思ひをした。北さんは、私の狼^{ろうばい}狽^{ばい}に気がつかない振りをして、女のひとに、

「太宰先生は、君たちに親切ですかね？」とニヤニヤ笑いながら尋ねるのである。女のひ
とは、まさかその人は私の昔からの監督者だとは知らないから、「ええ、たいへん親切よ」
などと、いい加減のふざけた口をきくので私は、ハラハラした。その日、北さんは、一つ
の相談を持つて来たのである。相談というよりは、命令といったほうがよいかも知れない。
北さんと一緒に故郷の家を訪れてみないかというのである。私の故郷は、本州の北端、津
軽平野のほぼ中央に在^ある。私は、すでに十年、故郷を見なかった。十年前に、或^ある事件を
起して、それから故郷に顔出しのできない立場になっていたのである。

「兄さんから、おゆるしが出たのですか？」私たちはトンカツ屋で、ビールを飲みながら
話した。「出たわけじゃ無いんでしょう。」

「それは、兄さんの立場として、まだまだ、ゆるすわけにはいかない。だから、それはそ
れとして、私の一存であなただを連れて行くのです。なに、大丈夫です。」

「あぶないな。」私は気が重かった。「のこのこ出掛けて行って、玄関払いでも食わされ
て大きい騒ぎになったら、それこそ藪^{やぶ}蛇^{へび}ですからね。もう少し、このまま、そつとして置

きたいな。」

「そんな事はない。」北さんは自信満々だった。「私が連れて行ったら、大丈夫。考えてもごらんなさい。失礼な話ですが、おくにのお母さんだって、もう七十ですよ。めつきり此頃、衰弱なさったそうだ。いつ、どんな事になるか、わかりやしませんよ。その時、このままの関係でいたんじや、まずい。事がめんどりますよ。」

「そうですね。」私は憂鬱だった。

「そうでしょう？ だから、いま此の機会に、私が連れて行きますから、まあ、お家の皆さんに逢つて置きなさい。いちど逢つて置くと、こんど、何事が起つても、あなたも氣易くお家へ駈けつけることが出来るというものです。」

「そんなに、うまくいくといいけどねえ。」私は、ひどく不安だった。北さんが何と言つても、私は、この帰郷の計画に就いては、徹頭徹尾悲観的であつた。とんでもない事になるぞという予感があつた。私は、この十年来、東京に於いて実にさまざまの醜態をやつて来ているのだ。とても許される筈は無いのだ。

「なあに、うまくいきますよ。」北さんはひとり意氣軒昂たるものがあつた。「あなたは柳生十兵衛のつもりでいなさい。私は大久保彦左衛門の役を買います。お兄さんは、

但馬守^{たじまのかみ}だ。かならず、うまくいきますよ。但馬守だつて何だつて、彦左の横車には、かないますまい。」

「けれども、「弱い十兵衛は、いたずらに懷疑的だ。「なるべくなら、そんな横車なんか押さないほうがいいんじゃないかな。僕にはまだ十兵衛の資格はないし、下手^{へた}に大久保なんか飛び出したら、とんでもない事になりそうな気がするんだけど。」

生真面目で、癪癖^{かんぺき}の強い兄を、私はこわくて仕様がな^いのだ。但馬守だの何だの、そんな洒落^{しゃれ}どころでは無いのだ。

「責任を持ちます。」北さんは、強い口調で言った。「結果がどうなろうと、私が全部、責任を負います。大舟に乗った気で、彦左に、ここはまかせて下さい。」

私はもはや反対する事が出来なかった。

北さんも気が早い。その翌^{あく}日の午後七時、上野発の急行に乗ろうという。私は、北さんにまかせた。その夜、北さんと別れてから、私は三鷹のカフェにはいつて思い切り大酒を飲んだ。

翌る日午後五時に、私たちは上野駅で逢い、地下食堂でごはんを食べた。北さんは、麻の白服を着ていた。私は銘仙^{めいせん}の単衣^{ひとえ}。もつとも、鞆^{かばん}の中には紬^{つむぎ}の着物と、袴^{はかま}が用意され

ていた。ビールを飲みながら北さんは、

「風向きが変りましたよ。」と言った。ちよつと考えて、それから、「実は、兄さんが東京へ来ているんです。」

「なあんだ。それじゃ、この旅行は意味が無い。」私はがっかりした。

「いいえ。くにへ行つて兄さんに逢うのが目的じゃない。お母さんに逢えたら、いいんだ。私はそう思いますよ。」

「でも、兄さんの留守に、僕たちが乗り込むのは、なんだか卑怯ひきようみたいです。」

「そんな事は無い。私は、ゆうべ兄さんに逢つて、ちよつと言って置いたんです。」

「修治をくにへ連れて行くと言つたのですか？」

「いいえ、そんな事は言えない。言つたら兄さんは、北君そりや困るとおっしゃるでしょう。内心はどうあつても、とにかく、そうおっしゃらなければならぬ立場です。だから私は、ゆうべお逢いしても、なんにも言いませんよ。言つたら、ぶちこわしです。ただね、私は東北のほうにちよつと用事があつて、あすの七時の急行で出発するつもりだけど、ついでに津軽のお宅のほうへ立寄らせていただくかも知れませんが、とだけ言って置いたのです。それでいいんです。兄さんが留守なら、かえつて都合がいくらいだ。」

「北さんが、青森へ遊びに行くと言ったら、兄さん喜んだでしょう。」

「ええ、お家のほうへ電話してほうぼう案内するように言いつけようとおっしゃったのですが、私は断りました。」

北さんは頑固^{がんこ}で、今まで津軽の私の生家へいちども遊びに行った事がないのである。ひとのこちそうになったり世話になったりする事は、極端にきらいなのである。

「兄さんは、いつ帰るのかしら。まさか、きょう一緒の汽車で、——」

「そんな事はない。茶化しちゃいけません。こんどは町長さんを連れて来ていましたよ。ちよつと、手数のかかる用事らしい。」

兄は時々、東京へやつて来る。けれども私には絶対に逢わない事になっているのだ。

「くにへ行つても、兄さんに逢えないとなると、だいぶ張合いが無くなりますね。」私は兄に逢いたかったのだ。そうして、黙つて長いお辞儀をしたかったのだ。

「なに、兄さんとは此の後、またいつでもお逢い出来ますよ。それよりも、問題はお母さんです。なにせ七十、いや、六十九、ですかね？」

「おばあさんにも逢えるでしょうね。もう、九十ちかい筈ですけど。それから、五所川原の叔母^{おば}にも逢いたいし、——」考えてみると、逢いたい人が、たくさんあった。

「もちろん、皆さんにお逢い出来ます。」断乎たる口調だった。ひどくたのもしく見えた。こんどの帰郷がだんだん楽しいものに思われて来た。次兄の英治さんにも逢いたかったし、また姉たちにも逢いたかった。すべて、十年振りなのである。そうして私は、あの家を見たかった。私の生れて育った、あの家を見たかった。

私たちは七時の汽車に乗った。汽車に乗る前に、北さんは五所川原の中畑さんに電報を打った。

七ジタツ」キタ

それだけでもう中畑さんには、なんの事やら、ちゃんとわかるのだそうである。以心いしん伝心でんしんというやつだそうである。

「あなたを連れて行くという事を、はつきり中畑さんに知らせると、中畑さんも立場に困るのです。中畑さんは知らない、何も知らない、そうして五所川原の停車場に私を迎えに来ます。そうしてはじめて、あなたを見ておどろく、という形にしなければ、中畑さんは、あとで兄さんに対して具合いの悪い事になります。中畑君は知っていながら、なぜ、とめなかつたと言われるかもしれせん。けれども、中畑さんは知らないのだ、五所川原の停車場へ私を迎えに来てはじめて知って驚いたのだ。そうして、まあせっかく東京からやつ

て来たのだし、ひとめお母さんに逢わせました、という事になれば、中畑さんの責任も軽い。あとは全部、私が責任を負いますが、私は大久保彦左衛門だから、但馬守が怒ったって何だって平気です。」なかなか、ややこしい説明であつた。

「でも、中畑さんは、知っているんでしょう？」

「だから、そこが、微妙なところなのです。七ジタツ。それでもいいのです。」大久保のはかりごとはこまかすぎて、わかりにくかつた。けれども、とにかく私は北さんに、一切をおまかせしたのだ。とやかく不服を言うべきでない。

私たちは汽車に乗った。二等である。相当こんでいた。私と北さんは、通路をへだてて一つずつ、やつと席をとつた。北さんは、老眼鏡を、ひよいと掛けて新聞を読みはじめた。落ちついたものだった。私はジョルジュ・シメノンという人の探偵小説を読みはじめた。私は長い汽車の旅にはなるべく探偵小説を読む事にしている。汽車の中で、プロレゴメナなどを読む気はしない。

北さんは私のほうへ新聞をのべて寄こした。受け取って、見ると、その頃私が発表した「新ハムレット」という長編小説の書評が、三段抜きで大きく出ていた。或る先輩の好意あふれるばかりの感想文であつた。それこそ、過分のお褒めほめであつた。私と北さんとは、

黙って顔を見合せ、そうして同じくらい嬉しそうに一緒に微笑した。素晴らしい旅行になりそうな気がして来た。

青森駅に着いたのは翌朝の八時頃だった。八月の中ごろであつたのだが、かなり寒い。霧きりのような雨が降っている。奥羽線に乗りかえて、それから弁当を買った。

「いくら？」

「——せん！」

「え？」

「——せん！」

せん！ というのは、わかるけれど何十銭と言っているのか、わからないのである。三度聞き直して、やっと、六十銭と言っているのだという事がわかった。私は呆然ぼうぜんとした。

「北さん、いまの駅売の言葉がわかりましたか？」

北さんは、真面目に首を振った。

「そうでしょう？ わからないでしょう？ 僕でさえ、わからなかつたんだ。いや、きざに江戸っ子ぶって、こんな事を言うのじゃないのです。僕だって津軽で生れて津軽で育つた田舎者です。津軽なまりを連発して、東京では皆に笑われてばかりいるのです。けれど

も十年、故郷を離れて、突然、純粹の津軽言葉に接したところが、わからない。てんで、わからなかった。人間って、あてにならないものですね。十年はなれていると、もう、お互いの言葉さえわからなくなるんだ。」自分が完全に故郷を裏切っている明白な証拠を、いま見せつけられたような気がして私は緊張した。

車中の乗客たちの会話に耳をすました。わからない。異様に強いアクセントである。私は一心に耳を澄ました。少しずつわかって来た。少しわかりかけたら、あとはドライアイスが液体を素通りして、いきなり濛々^{もうもう}と蒸発するみたいに見事な速度で理解しはじめた。もとより私は、津軽の人である。川部という駅で五能線に乗り換えて十時頃、五所川原駅に着いた時には、なんの事はない、わからない津軽言葉なんて一語も無かった。全部、はつきり、わかるようになっていた。けれども、自分で純粹の津軽言葉を言う事が出来るかどうか、それには自信がなかった。

五所川原駅には、中畑さんが迎えに来ていなかった。

「来ていなければならぬ筈だが。」^{はず}大久保彦左衛門もこの時だけは、さすがに暗い表情だった。

改札口を出て小さい駅の構内を見廻しても中畑さんはいない。駅の前の広場、といって

も、石ころと馬糞ばふんとガタ馬車二台、淋さびしい広場に私と大久保とが鞆かばんをさげてしょんぼり立った。

「来た！ 来た！」大久保は絶叫した。

大きい男が、笑いながら町の方からやって来た。中畑さんである。中畑さんは、私の姿を見ても、一向におどろかない。ようこそ、などと言っている。潤かつた達なものだった。

「これは私の責任ですからね。」北さんは、むしろちよつと得意そうな口調で言った。

「あとは万事、よろしく。」

「承知、承知。」和服姿の中畑さんは、西郷隆盛のようであった。

中畑さんのお家へ案内された。知らせを聞いて、叔母がヨチヨチやって来た。十年、叔母は小さいお婆ばあさんになっていた。私の前に坐つて、私の顔を眺めて、やたらに涙を流していた。この叔母は、私の小さい時から、頑強に私を支持してくれていた。

中畑さんのお家で、私は紬つむぎの着物に着換えて、袴はかまをはいた。その五所川原という町から、さらに三里はなれた金木町かみぎというところに、私の生れた家が在るのだ。五所川原駅からガソリンカーで三十分くらい津軽平野のまんなかを一直線に北上すると、その町に着くのだ。おひる頃、中畑さんと北さんと私と三人、ガソリンカーで金木町に向った。

満目の稲田。緑の色が淡い。津軽平野とは、こんなところだったかなあ、と少し意外な感に打たれた。その前年の秋、私は新潟へ行き、ついでに佐渡へも行ってみたが、裏日本の草木の緑はたいへん淡く、土は白っぽくカサカサ乾いて、陽の光さえ微弱に感ぜられて、やりきれなく心細かったのだが、いま眼前に見るこの平野も、それと全く同じであった。私はここに生れて、そうしてこんな淡い薄い風景の悲しさに気がつかず、のんきに遊び育ったのかと思ったら、妙な気がした。青森に着いた時には小雨が降っていたが、間もなく晴れて、いまはもう薄日さえ射している。けれども、ひんやり寒い。

「この辺はみんな兄さんの田でしょうね。」北さんは私をからかうように笑いながら尋ねる。

中畑さんが傍から口を出して、

「そうです。」やはり笑いながら、「見渡すかぎり、みんなそうです。」少し、ほらのようであった。「けれども、ことは不作ですよ。」

はるか前方に、私の生家の赤い大屋根が見えて来た。淡い緑の稲田の海に、ゆらりと浮いている。私はひとりで、てれて、

「案外、ちいさいな。」と小声で言った。

「いいえ、どうして、」北さんは、私をたしなめるような口調で、「お城です。」と言った。

ガソリンカーは、のろのろ進み、金木駅に着いた。見ると、改札口に次兄の英治さんが立っている。笑っている。

私は、十年振りに故郷の土を踏んでみた。わびしい土地であった。凍土とうどの感じだった。毎年毎年、地下何尺か迄までこおるので、土がふくれ上って、白っちゃけてしまったという感じであった。家も木も、土も、洗い晒さらされているような感じがするのである。路は白く乾いて、踏み歩いても足の裏の反応は少しも無い。ひどく、たより無い感じだ。

「お墓。」と誰か、低く言った。それだけで皆に了解出来た。四人は黙って、まっすぐにお寺へ行つた。そうして、父の墓を拜んだ。墓の傍の栗の太木は、昔のままだった。

生家の玄関にはいる時には、私の胸は、さすがにわくわくした。中はひっそりしている。お寺の納所なっしょのような感じがした。部屋部屋が意外にも清潔に磨かれていた。もっと古ぼけていた筈なのに、小ぢんまりしている感じさえあった。悪い感じではなかった。

仏間に通された。中畑さんが仏壇の扉を一ぱいに押しひらいた。私は仏壇に向って坐つて、お辞儀をした。それから、嫂あによめに挨拶した。上品な娘さんがお茶を持って来たので、私

は兄の長女かと思つて笑いながらお辞儀をした。それは女中さんであつた。

背後にスツスツと足音が聞える。私は緊張した。母だ。母は、私からよほど離れて坐つた。私は、黙つてお辞儀をした。顔を挙げて見たら、母は涙を拭いていた。小さいお婆さんになっていた。

また背後に、スツスツと足音が聞える。一瞬、妙な、（もつたいない事だが、）気味の悪さを感じた。眼の前にあらわれるまで、なんだかこわい。

「修ツちやあ、よく来たナ。」祖母である。八十五歳だ。大きい声で言う。母よりも、はるかに元気だ。「逢いたいと思うていたね。ワレはなんにも言わねども、いちど逢いたいと思うていたね。」

陽気な人である。いまでも晩酌を欠かした事が無いという。

お膳が出た。

「飲みなさい。」英治さんは私にビールをついでくれた。

「うん。」私は飲んだ。

英治さんは、学校を卒業してから、ずっと金木町にいて、長兄の手助けをしていたのだ。そうして、数年前に分家したのである。英治さんは兄弟中で一ばん頑丈な体格をしていて、

気象も豪傑ごうけつだという事になっていた筈なのに、十年振りで逢つてみると、実に優しい華き奢やしゃな人であつた。東京で十年間、さまざまの人と争い、荒くれた汚い生活をして来た私に較くらべると、全然別種の人のように上品だつた。顔の線も細く、綺麗だつた。多くの肉親の中で私ひとりが、さもしい貧乏人根性の、下等な醜い男になつてしまったのだと、はつきり思い知らされて、私はひそかに苦笑していた。

「便所は？」と私は聞いた。

英治さんは変な顔をした。

「なあんだ、」北さんは笑つて、「ご自分の家へ来て、そんな事を聞くひとがありますか。」

私は立つて、廊下へ出た。廊下の突き当りに、お客用のお便所がある事は私も知つてはいたのだが、長兄の留守に、勝手に家の中を知つた振りしてのこのこ歩き廻るのは、よくない事だと思つたので、ちよつと英治さんに尋ねたのだが、英治さんは私を、きざな奴だと思つたかも知れない。私は手を洗つてからも、しばらくそこに立つて窓から庭を眺めていた。一木一草も變つていない。私は家の内外を、もつともつと見て廻りたかつた。ひとめ見て置きたい所がたくさんたくさんあつたのだ。けれどもそれは、いかにも図々ずうずうしい

事のようにだから、その小さい窓から庭を、むさぼるように眺めるだけで我慢する事にした。

「池の水蓮すいれんは、今年はまあ、三十二も咲きましたよ。」祖母の大声は、便所まで聞える。「嘘うそでも何でも無い、三十二咲きましたてば。」祖母は先刻から水蓮の事ばかり言っている。

私たちは午後の四時頃、金木の家を引き上げ、自動車で五所川原に向った。気まずい事の起らぬうちに早く引き上げましょう、と私は北さんと前もって打ち合せをして置いたのである。さしたる失敗も無く、謂いわば和氣藹々わきあいあいり裡に、私たちはハイヤアに乗った。北さん、中畑さん、私、それから母。嫂や英治さんの優しいすすめに依よって母も、私たちと一緒に、五所川原まで行く事になったのである。行く先は叔母の家である。私はそこに一泊する事になっていた。北さんも、そこに一泊してそうして翌あくる日から私と二人で、浅虫温泉やら十和田湖などあちこち遊び廻ろうというのが、私たちの東京を立つ時からの計画であつたのだが、けさほど東京の北さんのお宅から金木の家へ具合いの悪い電報が来ていて、それがために、どうしても今夜、青森発の急行で帰京しなければならなくなってしまったのである。北さんのお隣りの奥さんが死んだ、という電報であつたが、北さんは、こりやいけ

ない、あの家は非常に気の毒な家で、私がいらないとお葬式も出せない、すぐ行かなくちゃいけない、と言つて、一度言い出したら、もう何といつても聞きいれない、頑固な大久保氏なのだから、私たちも無理に引きとめる事はしなかった。叔母の家で、みんな一緒に夕ごはんを食べて、それから五所川原駅まで北さんを送つて行つた。北さんはこれからまた汽車に乗つてどんなに疲れる事だろうと思つたら、私は、つらくてかなわなかつた。

その夜は叔母の家でおそくまで、母と叔母と私と三人、水入らずで、話をした。私は、妻が三鷹の家の小さい庭をたがやして、いろんな野菜をつくつていふという事を笑いながら言つたら、それが、いたくお二人の氣に入つたらしく、よくまあ、のう、よくまあ、と何度も二人でこつくりこつくり首肯うなずき合つていた。私も津輕弁が、やや自然に言えるようになっていたが、こみいった話になると、やつぱり東京の言葉をつか。母も叔母も、私がかどんな商売をしているのか、よくわかつていない様子であつた。私は原稿料や印税の事など説明して聞かせたが、半分もわからなかつたらしく、本を作つて売る商売なら本屋じゃないか、ちがいますか、などという質問まで飛び出す始末なので、私は断念して、まあ、そんなものです、と答えて置いた。どれくらいの収入があるものです、と母が聞くから、はいる時には五百円でも千円でもはいります、と朗ほからかに答えたが、母は落ちついて、そ

れを幾人でわけるので、と云ったので、私はがっかりした。本屋を営んでいるものとはばかり思い込んでいたらしい。けれども、原稿料にしろ印税にしろ、自分ひとりの力で得たと思つてはいけないのだ、みんなの合作と思わなければならぬ、みんなでわけること正しい態度かも知れぬ、と思つたりした。

母も叔母も、私の実力を一向にみとめてくれないので、私は、やや、あせり気味になつて、懷中から財布さいふを取り出し、お二人の前のテーブルに十円紙幣を二枚ならべて載せて、「受け取つて下さいよ。お寺参りのお賽さい錢せんか何かに使つて下さい。僕には、お金がたくさんあるんだ。僕が自分で働いて得たお金なんだから、受け取つて下さい。」と大いに恥ずかしかったが、やけくそになつて言つた。

母と叔母は顔を見合せて、クスクス笑つていた。私は頑強にねばつて、とうとう二人にそのお金を受け取らせた。母は、その紙幣を母の大きい財布にいれて、そうしてその財布の中から熨斗袋のしぶくろを取り出し、私に寄こした。あとでその熨斗袋の内容を調べてみたら、それには私の百枚の創作に対する原稿料と、ほぼ同額のものがはいつていた。

翌る日、私は皆と別れて青森へ行き、親戚しんせきの家へ立寄つてそこへ一泊して、あとはどこへも立寄らず、逃げるようにして東京へ歸つて来た。十年振りで歸つても、私は、ふる

さとの風物をちらと見ただけであつた。ふたたびゆっくり、見る折があるうか。母に、もしもの事があつた時、私は、ふたたび故郷を見るだろうが、それはまた、つらい話だ。

その旅行の二箇月ほど後に、私は偶然、北さんと街で逢つた。北さんは、蒼い顔あおをして居おられた。元気が無かつた。

「どうしたのです。瘦やせましたね。」

「ええ、盲腸炎をやりましてね。」

あの夜、青森発の急行で帰京したが、帰京の直後に腹痛がはじまつたというのである。「そいつあ、いけない。やっぱり無理だったのですね。」私も前に盲腸炎をやつた事があつた。そうして過労が盲腸炎の原因になるという事を、私は自分のその時の経験から知つていた。「なにせあの時の北さんは、強行軍だったからなあ。」

北さんは淋しほほえそうに微笑んだ。私は、たまらない氣持だった。みんな私のせいなんだ。私の悪徳が、北さんの寿命をたしかに十年ちぢめたのである。そうして私ひとり、相も変らず、のほほん顔。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集」ちくま文庫、筑摩書房

1989（昭和64）年1月31日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月から1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：ふるかわゆか

2003年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

帰去来

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>